

総合討議の記録

【内田】 それでは総合討議に入りますが、その前に、それぞれ発表で事実関係について質問がありましたらお願いします。

まず一番初め、私からの平城宮跡関係の話で何かございますか。なければ、立石さんの特別史跡平城宮跡での古代行事の再現についての話ではどうでしょう。工藤さん、どうぞ。

【工藤】 姫路市教育委員会の工藤です。先程報告書を少し拝見させて頂いたら、沢山の衣装を制作されていました。レンタルは非常に少ないというのが数字で分かったのですが、衣装を作るときは生地から作られたのですか。それとも既成の生地を用いて、こんなデザイン、こんな色ということで仕様を書いて、1300年協会から発注したということなのでしょうか。

【立石】 装束の話ではレンタルはないように見えているのですが、費用を軽減するために最終的に、装束を作った会社にその装束を引き取っていただき経費を軽減したということがあります。その時に、まず使うのは奈良県内で平城遷都のイベントで使いますが、その以後、その装束は装束を作った会社が自由にレンタルをして使っても良いということで、随分経費が下がっています。

装束のそれぞれの生地については正絹と化繊の2種類ございまして、正絹のものにつきましては一か



ら生地を染めて作りました。化繊のものについては、さすがに1着ごとに色を染めるということができませんので、これはその装束の会社が持っている生地の中から選んで、これをこの装束に充てようという形で作らせて頂いたというようなところなんです。

【工藤】 ちょっと考えが似ているところがあり、前例があるということで安心しました。ありがとうございます。

【内田】 続いて、岩川さん、どうぞ。

【岩川】 鹿児島島の島津家別邸仙巖園庭園から来ました岩川と申しますが、今日は勉強させて頂きましてありがとうございます。今関連の話ですけれども、大量に使っていらっしゃるお召し物の保存や保管などはどのようにされていますか？

【立石】 装束は京都の装束店で作り保管もそちらで、例えばその後の事業で私どもがその装束を使いたいということになるとそこからお借りする。ただしそのレンタル料は下げて頂く。また、その後のメンテナンスもそこが見るということで、よく引き受けてくれたなど、今でも思っています。一番初めに1300年の事業が始まったときにどこの業者で作るかという時に、その規模に堪え得る装束の制作会社という、どうもその装束店しかなかったもので、協議を重ねますと「引き受けます」と。ただ、装束店に直接委託はできませんので、当然間に広告代理店が入っています。そこにその装束店と話をしてもらって作ったのですが、使い方に関しては協会と装束店の間で連携をさせて頂くことになり、その後の装束の保管は装束店です。

【岩川】 ありがとうございます。ちょうど私のところも蹴鞠とか鷹狩のお召し物を作ってみようかなと考えているところなので、どんなふうに保存をしているのかなと思っていました。大手ですと安心、安全ですね。

【内田】 よろしいですか。では、3点目の報告、首

里城公園における再現イベントの実施について何か質問ございますか。高橋さん、どうぞ。

【高橋】 催事検討委員会とは、建物の復原検討委員会と並ぶような、催事にかかる委員会でしょうか。

【幸喜】 若干の変遷を経ていますが、催事の検討委員会と復原建物の整備検討委員会と並列する感じで、建物そのものの復原が終わったら消えていく小さな部会なども色々あったりし、基本的には幾つかの委員会が並列してあるという形になります。以前は親委員会みたいな形があって、その下に部会が設けられるというスタイルの時もありました。何人かの先生方は兼任しているというような状況でした。

【高橋】 ありがとうございます。

【内田】 入佐さん、どうぞ。

【入佐】 福岡県の入佐でございます。残念ながら去年、首里城の正殿は燃えてしまい今、復原準備がされていると思いますが、首里城跡の火災を受けて、この再現イベントに対する県民の方の思いが変わったということはどうですか。

【幸喜】 元々通常は首里城公園の入館者の8割から9割は県外からの観光客が圧倒的に多いのですが、逆に再現イベントの実施をしている日は断然県内の人が多かったです。焼失後は今のところ中々再現イベントができていなくて、令和2年の1月は、何とか燃えていない場所を使って規制線の内側から国王が歩くという変な出御式を強引にといいますか、実施しました。現状ではきちっとできていないというのがあるのです。さて、では今後それをどこまでどう再現できるかというのは、今年度はまたコロナの関係もあって、これまでやってきたような国際通りの大きな絵巻行列とかもちょっと厳しいだろうという話になっています。色々やってほしいという声はあるのですが、さて、どうしてやろうかというのはまだまだ思案中の段階です。イベント自体が実施できていないため、県民の意識がどう変わったのかについては、今後徐々にわかるのかなと思います。

【入佐】 ありがとうございます。

【内田】 岩川さん、どうぞ。

【岩川】 岩川です。2点伺います。1点目がキャスティングです。国王さまとか王妃さまをどのように決めていらっしゃるのか。言わば天皇さまのイベントのときには天皇さま役がないというところが多い中で、国王さんをどのようにキャスティングされるのか。尚氏さんは御子孫いらっしゃいますけれども、そのあたりは御子孫とやりとりをされるのかどうかというのを含めてです。

もう1点は、いわゆる冊封使の再現もされていますが、ここに関しましては中国側とのやり取りとかがあったりするものですかということです。

【幸喜】 キャスティングについては、今現在でいうと毎年一般公募をしており、国王、王妃役を令和2年9月の中秋の宴というイベントの中で決めていました。国王衣装と王妃衣装がありまして、基本的にはこの衣装のサイズに合う人を選ぶということです。復元する前のオリジナルの、国宝になっている尚家の資料についてはもっと小さく、165cm弱の丈なのですが、復元したものは175cmぐらいあるものですから、どうしても170cm以上という若干の条件はつけています。その以前は誰がなるのかということで地元の偉いさんであったり行政の偉い人であったり、方々から色々な声があって困ったことがあったと聞いています。今はもう基本的には国王、王妃は一般公募した方に1年間それを務めてもらうことになっています。イベントのリハーサルを結構たくさんする必要があるものですから、夜間しかできないリハーサルには参加してもらうということも条件とさせてもらっています。

それ以外のイベントでさっき申し上げた中国語で仕切る重要なキーポイントの役職については、最初に復原事業を起こした時から一緒に組んでもらった、沖縄の芸能関係の方々はずっと引き継いでもらっています。それ以外は毎年公募で声掛けをして、ボランティアとして参加してもらうという感じになっています。

もう1つの冊封儀式については中国側とというのは特に何もなくて、基本的には県内の中でやっています。先程も衣装の復元の話がありましたが、うちの場合は全部財団の方で保管しておりまして、当初全部、織物も首里織の藍染めの本物の織物を使ってやっていたのですが、やはりイベント業者が、取扱いが大変過ぎるということがあって、本当に重要なメインのキャスト以外は全部化繊のほうに切り替えてくれと言って、どんどん切り替えています。中国側の衣装についても、当初平成4年のスタートする時に中国の方で作っているという部分があるのですが、中国で作ったものについては、その後入手が難しく、中国側の衣装だけがどんどんぼろぼろになっているというような感じになって、メンテナンスに困っていた。その修理とかを含め中国側とコミュニケーションを取るのが中々難しく、こっちが思った通りに直してくれなかったりするので、結局直すのは京都の方に出すというのが多かったです。

中国の冊封儀式の時には、中国皇帝からもらった御書を読み上げるというのが1つのクライマックスのシーンになるのですが、そこについては県内にいる中国の留学生に宣読官という読む役職をしてもらったり、県内にいる中国の方々に協力してもらいながら実施しています。

ただ、今現在はやっていない形で、大きなステージを組むものがありました。大型機械を持ってきて組むことができないので、全部人力で色々な資材を運び込みます。これが全部夜間作業で、何日も何日も夜中じゅうかけて組み上げていくというのを繰り返すのです。イベントそのものは2日間、午前中で終わってしまうものですから、職員を含めると、結構大変な割には費用が高くて半日しかできないというイベントなので、ちょっとこれはなかなか厳しいぞというのがありました。現在はやっていません。

【岩川】 ありがとうございます。言わば、国王と王妃様は親善大使みたいな感じなのですね。冊封使に関しまして伺ったのは、鹿兒島城跡で御楼門という、

お城の門が出来上がったのが令和2年4月で、もとコロナの状況がなければ、関連イベントとかで行列を組んでいこうという時に、その門を使うというのは参勤交代の時か琉球国王からの使者が来られた時ぐらいしかなく、琉球国王の謝恩使、慶賀使の行列をやるという提案があった時に、沖縄側からどんな意見が来るのだろうねという、言わば琉球出兵した側からすると非常にきつところだったので、どんな感じで中国と琉球、またちょっと関係が違いますけれども、やり取りされているのかなと思った次第でした。ありがとうございます。

【内田】 次に4つ目の報告、大内氏遺跡での料理等「歴食」の再現と地域性というお話についての質問はございますか。町田さん、どうぞ。

【町田】 朝鮮通信使の饗応料理の再現を何度か行っただけですが、いつも問題になるのが味付けなのです。食材や調理法は文書や記録などでわかるのですが、味付けまで記録に残されていないですね。要するにどんな味付け、出汁は何を使ってとったのかということです。饗応には汁が必ず数種類提供されるのですが、例えば汁の具材として鶴などの鳥、鯛などの魚や野菜があるのですが、その素材のもつ味だけで汁ができたのか、昆布で出汁をとったのかなど、鰹節は使ってもよいのかなど、質問されます。歴史屋でそのあたりは不勉強なので、いつも困っています。よくわからないまま、昆布は古くからあったことが確認できるので使用して良いのではないかと。鰹節はよくわからないから、昆布主体でお願いしますなどと、調理にあたる料理長さんに苦しまぎれに申しています。大内の料理にも汁などがあるのですが、いわゆるお出汁というのは何を使われていたのかをお訊ねいたします。

【江後】 たしか、昆布は延喜式の頃にはもう出ていますので、使われていたと思うんです。カツオは茶会記には出てきますけど、ちょっとそれ以前のことには分かりません。茶会記に花カツオと出てきますので、だから、鎌倉じゃないかと言われていたのが、それが確かであるならば、中世にはかつおぶしは

あったと言っていると思います。

【町田】 では、通信使をもてなした江戸時代の饗応料理であれば、当然かつおぶしは使っていたというふう理解してもよろしいわけですか。

【江後】 はい。

【町田】 助かります。ありがとうございます。

【江後】 調味料は、大内氏の場合も醤油は使わないで下さいというので、できるだけ素材の味でというのでやったんですが、ひしお、味噌の原型の垂れて出た部分、そういうのは使っていた可能性はあるので、これも難しいところではあります。今回はそういうものは一切使わないでやって下さいというふうになったのですけど。

【町田】 どうも、ありがとうございました。

【江後】 私、先程ちょっと言い忘れましたが、中世の記録に今でいう名物というか、そういうものが出てくる場合があります。例えば大阪南部の水ナスとか、『山科家礼記』等にも出てくるわけです。それから、奈良ですから奈良漬も茶会記『宗湛茶湯日記』に初めて、文献上は出てきたと思います。だから、そういう古いものの中から拾っていけば、地域の産物と結びつけてということもできるのではないかなと考えています。

【内田】 ありがとうございます。(中略) 他の方に対する質問がなければ質問関係は終わりにしたいと思います。今までの実績についてお話をしてもらいましたが、今現在、いわゆるLiving History促進事業が行われております。その中で、福岡県の方ではコロナ禍におけるLiving Historyの動きというのが若干あるということなので、入佐さんからまず新しい動きとして御報告をお願いいたします。

【入佐】 今年から始めているので、まだ成果が出ているわけではないのですが、2019年度申請して、2020年度に交付決定が出たらコロナになっていたという状況の中で、どのように事業を企画していったのかという事例を、福岡県世界遺産室の事業としてお話しします。福岡県には、世界遺産に登録されている「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群という物

件がございます。恐らく多くの方は御存じだと思いますが、普段、沖ノ島には渡島できません。禁忌の関係で行けても男性だけというようなところがございます。船で沖ノ島に行くのですが、島を中心に半径2キロの範囲が史跡なので、史跡地を周回して帰ってくるというツアーをLiving Historyとして企画しております。それに合わせて宿泊だとか食だとか、そういったのを絡めています。ポイントとしては、今、博多港から韓国の釜山までを結ぶビートルという船があるのですが、今、これはコロナの関係で不通になっています。これを利用して国内向けに使うということを企画しております。ターゲットは当然国内の人間で、そのうち海外の方もというイメージです。

それと併せてなんですけど、沖ノ島へ釣り客を乗せていく民間の船とかもあったのですが、史跡や世界遺産になったことで、渡船を控えていただいている現状があります。その渡船を同様にツアーに使う取り組みも検討しています。企画段階の内容ですが、文化財保護の観点とコロナ禍のLiving Historyの在り方ということで、紹介させて頂きました。

【内田】 ありがとうございました。次に、私の報告の最後に若干触れたのですけれども、歴食関係は平城宮でも少しやっているところがございます、これに関して、古代食の再現ということで、高橋さんから簡単に御報告をお願いします。

【高橋】 追加資料「奈良文化財研究所による古代食・再現展示」をご覧ください。歴食に関連して、奈文研ではどのような古代食監修に取り組んできたのかをまとめてみました。(以下、本書97-102頁記載内容の報告)

【内田】 ありがとうございました。高橋さんには、今まで奈文研がやってきたことをちょっとまとめてくれとお願いしまして、思いもよらず著作権関係の話もあったりして、実際に事業としてやろうと思ったら難しいことが出てくるものだなと思いました。今の報告に対する質問は、何かございますか。

【町田】 ちょっと教えて頂いてよろしいでしょう

か。

料理のほうで、味付けのことについて、何かしきりに拘っているみたいで申し訳ないのですが、奈良のホテルのものは、今の人に合うように少し味付けを変えてらっしゃるということですか。と申しますのが、予稿集の55頁のところで、「当日夜には、割烹旅館に行列参加者の来賓などを招き、引替膳を試食した。ただし、当時の調理法だと薄味であるので、料理長の希望で少し味付けを濃くして夕食となるようアレンジした」と書いているのですが、私はこのアレンジには反対で、そのまま出してとお願いしたんです。しかし、料理長の方が、「俺のところの料理がまずかったと後で言われたくない。」ということをおっしゃって、そこはどうしようもないな、ということで、食事する前に皆さんに、私の方から、「少し現代風に味がついているかもわかりませんが、これがそのまま当時の味とは思わないでください。」などと注釈をつけて、食べて頂いたということがあるので、ちょっとそこが気になりました。

【高橋】 先代の料理長さんがかなり熱心に取り組んでおられて、味付けも薄味としてオーナーさんに出したところ、商品にはならないと言われて、結果として現代人に合わせた味付けにした、と聞いております。拘りという意味では、私たちのような文化財を専門とする人間の方が、嘘になってはいけないという拘りがあって、結果として何もできない、ということになってしまいがちです。そのため、根拠となる部分を示す役割と、アレンジしていく役割というように、役割分担をきちんと行なう方が良い結果を招くのではないかと思います。奈文研は純粹に資料提供のみをおこなって、そのホテルさんが出しやすい形にしているという状況かと思えます。

【内田】 どうぞ、幸喜さん。

【幸喜】 首里城のほうでも、近くのホテルさんからのアイデアで、以前ペリーが琉球に来た際に、ペリーを歓待するための琉球側の歓待料理と、ペリー側がその後琉球側を迎えて料理を作ったという、お互いに接待するときの料理の復原事業というのを県内の

ホテルさんと一緒に実施しました。そのときに僕は県内で料理を研究されている先生の仲立というか、お手伝いをさせてもらったのですが、一応復元的な料理はそんなにたくさんじゃなくて、ある程度復原を追求したものと、その周辺に同じ材料を使ってアレンジしたものの両方を置くというような感じでやっていました。最終的にはそれをホテルとしては商品にして、「今回は琉球側の料理です」、「次はペリーの料理です」みたいな感じでやっておられました。この復原する料理の方はかなり追求して復原をして、研究している先生がホテルの調理にすごい駄目出しして、調理人の表情がみるみる変わっていくのを傍でどきどきしながら見ていたのです。アレンジは結構アレンジしたなというぐらいにアレンジされてしまったのですが、この場合は復元とアレンジ両方作って、両方を売り物にするみたいな感じで評判が良かったようです。

【内田】 ありがとうございます。ちょうど今、料理の話で、話がちょっと深まってきているので、このまま料理の話をしたと思います。

ペリーが沖縄に来た時の料理の再現では、復元的にやったのと、もう1つは現代の味付けの2種類を作ってみたというお話でした。江後さん、いかがなものでしょうか。

【江後】 もし試食される方が両方食べてみられるのであれば、これは一番良いのですが、料金的にどうなの。ミニ懐石じゃないけど、そういうものが2通り食べ比べできるのであれば、それはそれで面白いと思います。

【内田】 確かに両方食べ比べることができたら、学術的に正しい料理と、あとは現代で食べておいしい料理というようなことで、それが一番ですよね。さっきの話じゃないですけど、幾ら学術的に正しくても、美味しくなかったら継続しないだろうし、それでまちおこしも難しいということになりますよね。誰でも共通すると思いますが、やはり行く気になるためには、料理である限り美味しいことが重要であって、それとは多分別に学術的な興味も我々は持っている

のだということだと思います。歴食というのはどうなのでしょう、史実として材料はある程度確実に分かるものがあることからすると、材料が揃ったところで、こういう材料で食べられていましたと、材料中心の再現みたいなことにし、味付けについては現代風にしましたという割り切りが無難なのかなと個人的には思うのですが、いかがなものでしょうか。

【江後】 私、日本人は本当に醤油に毒されていると思っているのです。いつだったかポルトガルに行った時にイワシの塩焼きを売っていたので、それを食べにみんなで行きました。向こうは何で食べるかという酢と塩とオリーブ油、それしか卓上にないわけです。そうしたら私が小さい魚の容器に入った醤油をいっぱい持って行ってたのを一緒に行った人は知っていたので、「江後さん、醤油、醤油」と言っています。だから、習慣も含めて色々難しいなとは思っています。

【内田】 ありがとうございます。話を進めていきたいと思っています。そうしたら、再現行事について色々御報告がありましたけれども、やはり史実の部分と推測部分、アレンジ部分、この辺は行事を実施する上で何らかの方法で伝えないといけないのだということについては、恐らく皆さんの合意は得られるのではないかと思います。実際、長く再現行事をやられている仙巖園の岩川さん、この辺りについてはどのように進められているんでしょうか。

【岩川】 仙巖園のほうでは、1980年代の前半に学芸員が色々入って、そこからすぐにそういった再現行事というのを始めました。実は91年からだと思うのですが、曲水の宴を始めて、それ以降は五月のほり、鯉のほりの源流であったり、また鎌倉武士のたしなみの草鹿式をしたりとかして、近年では鷹狩をはじめ、今後蹴鞠とかもやっていきます。史実としましては、例えば曲水は発掘調査で曲水の庭が出てきたというのがスタートなのですが、発掘されて20年ぐらい経って、じゃあそれをやろうという時に、情報としてあるのは「庭がある」だけでした。文献資料では曲水の宴を仙巖園でやっていたというのは

一言も出てこないものなので、どうしたかという中国の蘭亭に行って、さらに宮内庁にも行ってそれぞれ資料調査をして、江戸時代に造られた大名庭園でどうなされていたのかという着地点は、そこに行っても結局は分からないわけなので、全部盛り込んだのです。中国のほうでは曲水の宴で耳杯という、耳がついている陶器の杯を流すのです。宮内庁の方に残っているのは、羽觴と言われる水鳥の形をした船に杯を置いて流すのです。どっちもやるということで、そういうふうな中で全部盛ってしまった形なのです。お客様の方にどうやってそこを伝えていくかという、「今流れているものは耳杯と呼ばれるもので、今流れているのは羽觴と呼ばれるもので」という形で、アナウンスでお客様に伝えています。お召し物にしても同様な形で、江戸の大名庭園なので、武家の正装に合わせて行っています。

一方で問題としてあるのが、曲水の庭がお客様からすると何十メートルも結構離れているところなので、今流れているのが耳杯でと言われても、これぐらいのが流れていて、何十メートル先から目視できないというのがあるので、多分お客様としては何が羽觴であろうが耳杯であろうが、何かが流れているぐらいしか認識できないのです。そういったものを、どうやって「見える化」したり分かりやすくしたりするかというのが、今も本当に試行錯誤しているところです。

多分、皆様方のところも同じかと思いますが、取りあえずできるところで挑戦して、あとはお客様方に心躍って頂くという、間口としての再現になっているのかなというのが現状でございます。

【内田】 ありがとうございます。今、小さくて見えないようなところという話があってちょっと思い出したのですが、韓国の宮殿での再現儀式で、演者の手元などが見えないようなところについてはカメラでアップして、現場の大きなモニターで映して、説明をするというようなこともやっていると聞いておりますので、その手法は使えるなと今、思ったとこ

ろです。

あと、アレンジ部分などについては、やっぱり御説明というのはされているのですか。

【岩川】 いつも、流れていますというふうに言って、流れているのをひたすらお客様も見ているのもしんどいので、曲水の宴の由来等を話す中で、アナウンサーと学芸員と、実況中継をするような方式で紹介をしています。あとはお手元の資料でというような形でパンフレットを配布して、理解度を高めています。

【内田】 わかりました。そういたしましたら、あとは伝達方法についてですが、ナレーションやパンフレットというのも今日の発表の中であったかと思えます。事実を伝えたりする上での方法は他に何かされているようなことはございますか。幸喜さんの首里城跡ではいかがですか。

【幸喜】 基本的には、パンフレットで行っていました。イベントパンフレットと解説パンフレットの2種類を作成していました。

【内田】 大川さんの齋宮跡では史実を伝えるのには、とにかく博物館の方で再現ビデオを使いできるだけ学術的な内容は伝えているというようなお話だったですね。

そういたしましたら、再現事業の中では衣装や道具の検討というのが必要になってくるわけですが、今現在衣装を作られているということで、姫路市の工藤さんの方から今苦勞されているようなことがあれば状況をお話いただけますか。

【工藤】 姫路藩の大名行列を再現するということは観光部局の仕事なのですが、再現作業の基本的なところは教育委員会が担当することになり、私の方でやっているところです。衣装に関しては、姫路藩の行列を描いた絵巻物が3本ありまして、そのうち衣装や道具を詳細に描いているものが2本あります。ただ、どちらも姫路城下で行列を組んだところを描いたものではありません。1本目は江戸の姫路藩上屋敷から江戸湾に出陣するときの様子を描いた行列で、2本目は将軍の名代として京都に上洛したとき、

多分京都市中を歩いているところの行列なので、姫路の城下町での行列とは、少し史実とかけ離れているところがありますが、行列再現の根拠となり得る資料が他にありませんので、それらを使うことに致しました。そこに描いてある絵を基に、私どもの場合はある衣装屋さん、こういう感じでこのような色目でどうだろうかということで相談し、既成の生地を提示して頂きまして、その中から色合いとか柄の近いものを選んで衣装を作ってもらいました。生地も、既成のものにしたのは、先程も他の方もおっしゃられていたように、不特定多数の人がこれから毎年着用しますので、メンテナンスのしやすさとか、傷んできたときの補修のこと、あるいは保管のことを考えたら、やっぱり既成のものの方が工程もコストもかからないという理由からです。詳しい人が見たら「それでは復元じゃない」とおそらく指摘されるころだろうなという恐れを感じつつも、制約された時間と予算で形にするためには仕方がないところでした。

皆さんは江戸時代の文化、多分ある程度御存じだと思のですが、武士は基本、羽織と袴です。それを約70人分作りましたが、大変に地味な色合いです。いわゆる今日皆さんが着ているようなスーツ姿の人が行列を作って歩いているようなものなので、全然見栄えは良くないです。それは仕方がないことで、そういう羽織姿で歩いていたのですから、NHKの今の大河ドラマのように華やかな衣装を創作するわけにはいきません。そこでアレンジを加えました。道具に関しても、基本は絵に描いてあるとおりに作ったのですが、絵巻には金箔を塗った鞆とか、金紋を描いた対挟箱とかが出ていますので、そういう奇麗な装飾や絵の描かれた道具を優先的に作って頂いて、羽織・袴の地味な色合いの分、そこでちょっと見栄えを良くしています。本来なら例えば鉄砲隊、弓隊という各部隊があって、その部隊を象徴する道具を全部、1つずつ作っていけば良いはずなのですが、それでもすべてを作ることはできないので、見栄えが良いものや特異な形状のものを選択して作る

というふうに、一般の人が見たときに関心を示すようなものを特に抽出しました。衣装の件でもそうですが、それが学芸員のやることかと言われると、すいませんと謝るしかありません。結果的に、観光部局が求めているイベント性やコスト面にこちらが配慮したものとなりました。

大名行列とは別にもう1つ、同時並行で千姫の衣装を復元しています。こちらのほうは服飾の専門家に監修して頂いて、先ほど立石さんのところも生地から作られたというお話がありましたけれども、こちらのほうは生地や染色も伝統的な技法を保持する業者にちゃんと作っていただき、他の博物館での展示に貸出ができるようなつくりのものを制作中です。良く作っていますので、今後、どうやって保管したらいいかと頭を悩ませているところです。以上です。

【内田】 ありがとうございます。そうしましたら、再現関係はそれぞれ工夫しながら色々やられていると思いますが、やはり最後には報告書というのがすごく大切なことなのだろうと思っております。そうした中で、韓国の文化財財団では毎年、何年何月の儀式の再現とかテーマを決めてやっていますが、それに合わせて、その関係の資料集というのをまずは出して、そして事業が終わったら、その事業報告書を出すということをしています。朝鮮王朝時代で特別に古くはないですから資料がある程度残っているというのが根本的にはあるのですが、とにかく重要なことをしっかりとやっていると思っておりますのでございます。

そうした中で、立石さんの1300年協会では報告書を纏められていて、報告書に対する思い、すごく強かったと思いますがいかがでしょうか。

【立石】 簡単に言いますとイベントなので、当初は基本的にこの行事を再現するに当たって誰からもそんな報告書で学術的なことを求められていませんでした。ただ、この1300年事業の中で、あれだけ大きい規模の協会の中で、実を言うと文化財の学芸員が私一人だったのです。当然のことながら、観光部門

とか経済部門から色々な話があって確かにそれに協力はするけど、やるべきことは何だったのということを残しておかないと、私がなぜ行ったのかわからないということになるのはしゃくだなという思いが事業を作っている最中からありまして、ここはしっかり記録を残して置きましょうということで、作ったものです。あの報告書は、やったことについては、ある程度纏めているのですが、その前に、資料調査の報告分というのがあるのです。それは刊行されていないのですが、報告書の3倍ぐらいの量で、協会での私の作成過程の記録としての報告書です。そういうのがあって、それを纏めて作ったものが報告書となっています。作る目的は、さっきも申しましたが、何のためにこの事業を行ったのか、どのように再現したのか、本当のところは何で、作っちゃったのはどれか、ここはしっかり残しておかないと、次にそれを行うとなった時に、皆さんも多分思われるでしょうけど、一旦製作者の手を離れると、どんな形になるかわからないのです。それが怖いと思って、その時で考えていたことは、しっかり記録に残して置くようにしました。

それを踏まえて、次にしっかり作っていかれるのなら、それもよし。崩していかれて、観光のイベントにされるのは本意ではないですけど、それもあるのかなということで、その根本のところは一体何だったのかはしっかり残して置かないといけないなと思って、報告書を作りました。求められている訳ではなかったのに、「そんなの作るの?」と言われながらも「作るねん」と言いながら、最後まで引張りました。ただ、全てを語れたかという、中々そういう訳でもなくて、ちょっと尻切れトンボのところもあるなと思っています。ただ何をしたかということはしっかり残しておこう、それはどういう根拠に基づいて行ったのか、どういう判断があってそうになったのか、そこはやはり一定残して置くべきであって、その時に判断された、実施主体が一番良いと思ったこととして残して置きましょうということで、あの報告書を作らせて頂いたというところです。

本当を言うと、もっと学術寄りのことも記載して置きたかったのですが、それは最終的に時間もお金もということで、そこで止まってしまうたけれども、そんな思いがあって作らせて頂いたところなんです。ですから、何かを作るという時、特にこういった古代行事の再現という時には、そのところは書き留めておく必要はやはりあるのかなというのは今でも思っておりますし、これから私どもがそういうことに関わるのでしたら、作るごとに、やはりそういったものは残していきたいなというふうに思っているというところです。ちょっと思いついた話になって申し訳ないです。

【内田】 ありがとうございます。経緯からお話いただきました。斎宮歴史博物館では実施した事業について年報などで何か書かれているのでしょうか。

【大川】 本来年報をきちんと出していかなきゃいけないのですが、平成の途中から刊行物としての年報を出していないので、本当に今のお話を聞いて、もっともというか、その通りだと思って聞いていました。例えば当館では、実際の行事も補完するものとして映像ソフトを作ったと報告させてもらいましたが、ではあの映像ソフトは本当に学術的に全然問題ないかというのと、決してそういうわけでは恐らくなく、映像作品とするために調整したり妥協したりしている部分はある。ああいう映像ソフトを作った段階で、やはりこういう考証をして、ここは確実、ここはちょっと調整した、というのは検証過程を残していかなきゃいけない。これは多分こういった学術的なものを発信する上では、行事だけではなくてソフトであったり、色々な報告類であったり、例えば模型を作ったりとかいうときにも全部共通するな、そういうことだなというのを、逆に納得して聞かせて頂きました。ありがとうございます。

【内田】 映像ソフトの話が今ありましたが、メイキングの話としてでも、ここの部分が確かなところで、ここの部分が推測した部分だとかを記録したものが一緒に作れたら、学術的には良いことだななどと思ったところがございます。

岩川さんの仙巖園ではどうでしょう。再現事業を色々やられてきて、これからもやっていくということで、それについてのノウハウはかなり蓄積されていると思うんですけども、根拠みたいなのは、報告書とか何かを見たら分かるようになっているのでしょうか。

【岩川】 曲水の宴に関しましては、スタートのオープニングスタッフを務めたうちの前館長が、途中の何年か目の段階で、どのようにしてこのような感じのものにしたのかというのを研究紀要の中に書き残しました。それをベースとして、こちら辺は何から引っ張ってきているかというのでしています。それを見てという形ですが、実際に運営する側のスタッフからすると、それを見ていないのも多かったです。だから1個1個がよく、十分理解していないまま走っているところもあります。なので、一応毎年内部での報告書は出しながら、課題点とか史実であったり、また営業面の課題であったりをブラッシュアップしています。

【内田】 ありがとうございます。今、報告書関係のお話が出てきておりますけれども、幸喜さんの首里城跡では、事業に対する報告書はどうされているんですか。

【幸喜】 そうですね。内部でこういった形でやりましたという報告書は出しているのですが、ここに至る前段の、どういうふうに検討されてきたのかというのは国の委員会の方でまとめられていて、ほぼ全部内部資料というような形でまとめられていて、ここに至る過程というのはオープンになっていない状況があるのです。それがちょっと難しいなと思うところがあるのですが、国の委員会の結果を踏まえて、それを財団が受け継いで、イベント会社とどのように台本を作ってイベント化していくのかとか、衣装については、今持っているのは使えるのかとか、新たに作らなきゃいけないのかというようにやってきているので、財団の分担についても報告書は作っているのですが、基本、内部資料としてしか纏めていないということになります。

一般の見学者が見ると、さも1から10まで全ての分かっていて、あのイベントができていうふうに見えるのですが、いやいや、本当はこんなに苦労しているのですよということとか、先程から意見がある、やはり後から見た時になぜそうなったのかということとかは、オープンにしないといけない部分はあるのです。しかし、色々な意思がたくさん関わっている部分があって、今のところは出来上がったものに対して、ここは違うのですよというのは、その都度、イベントの時にパンフレットと台本、アナウンスで知らせているといった経緯になっています。だから、後から見た人たちがそれを検証できるようになっているのかということについては、今現状ではそうっておらず、あくまでも内部資料だけで留まっている状況になります。

【内田】 ありがとうございます。

過去にあったら儀式としての再現を中心に話が進んできましたが、鳩山町では地域間交流の中で儀式風に演出してやっておられるとのことでした。我々のところでも赤米献上隊というのがあって、歴史的事実として荷札木簡がある。それが根本で、それに対する返抄木簡という受領書に当たるような木簡を書式に合わせて作っているわけです。結局受渡しの事実を演出というようなことで、儀式的にせざるを得ないというところがあるのです。手島さんのところもやはりそういうことなのかなと思って聞かせて頂きました。その辺いかがなものでしょうか。

【手島】 瓦の進上に関する歴史的事実としては、武蔵国ではありませんが平城宮跡から出土した木簡に「進上瓦三百七十枚」などと書かれた史料があります。これについては寺崎保広さんが報告をされております。ですから、瓦の生産現場から造営現場に対し、荷札をつけて瓦が送られたのは史実なのですが、受渡しの儀式をやったという史実はないのです。ただ、それを一般の方にどう伝えるかとなった場合に、ただ単に瓦の検品を舞台上でやってというだけではなかなか人が呼び込めないということ、それだけでは鳩山町と国分寺市の瓦の生産地と消費地という繋

がりが見えていても伝わりにくいということから、儀式という形で若干のアレンジを加えながら再現をしているというのが実態です。

発表の最後が足早になってしまったのですが、課題としては、国分寺市と鳩山町の歴史的な繋がりという部分については十分に、舞台上で進行しながらナレーションの方から説明があったのです。しかし、やはり考証にかける時間というのがあまりなくて、儀式部分のシナリオを、実際にこういった文字瓦なりが出ていて、運上に関してこういった文書が瓦の生産地から消費地に対して送られていたというような事実がありますといったような、こうした説明は舞台上でも行われなかったということです。

今日の発表については、瓦受け渡し式用に作成された運上目録を読んでいくと、出土した文字瓦の書かれている内容などから起こしたのだろうというのが類推されます。ですから、当時の担当もそういった出土資料が国分寺市にあるというのは分かっていたはずなので、恐らくそういった資料を参考にして組み立てたのだろうという、私の推測の部分になってしまうのです。本来なかった儀式を今後やるようになったら再現するに当たって、やはり史実とそうでない部分というのをもう少ししっかりナレーションで説明したり、リーフレットを用意するという形で、一般の人にも誤解のないようにやっていく必要があるのかなと思います。

【内田】 ありがとうございます。再現事業全般に、とにかく言えることだと思うのですが、史実がどうだったかという話と、あとは近いところでの推測と、そしてアレンジをしないと全体が成り立たなくなってくる部分は演出としてこうやっていますということ、やはりナレーション中心で伝えるということになるんじゃないのかなと思います。それが一番無難なのではないでしょうか。その辺りについて皆様はどうでしょう。

高橋さん、どうぞ。

【高橋】 史実と演出の仕分けを説明する際に、併せて根拠となった資料の実物を展示していく、という

ことも効果が高いと思います。私たちが取り組んでいる赤米献上隊の受け入れ事業においても、赤米を受け取る儀式は演出としておこない、その後、この事業のきっかけとなった木簡の実物を子供たちに実見してもらっています。儀式や、解説を聞いているときに比べて、実物を目の前にした時の子供たちの目の輝きが違って、実物の持つ力というのは凄いのだと、改めて実感しました。文化財分野が得意としている展示、実物の公開というのが、このような事業でも大きい力になると思います。

【内田】 良い指摘、ありがとうございます。オリジナルの木簡は30cmもないようなものですが、それに似せて小学校が大きく作って持ってきてくれるのが倍以上ありますか。それを子供たちは見ているものだから、本物を見たときに、「えっ、意外と小さい」というのが感想でありました。まさにそういう本物を見て頂くということを今年度は10月30日にします。さらに出土地に近い推定宮内省の復原建物を使いますので、少し先のあの草の辺でその木簡が出たというような、出土地についての一応の説明もできるなと思っています。奈良時代の史実と1300年を経てきた現在の遺跡という空間が出土品を通してやっとな結びついていくということが、遺跡の現地を使うメリットになるのかなと思っています。それを繋ぐのが出土品だと思っているところがございます。

さて、運営体制ということでは、Living History 促進事業だと文化財課がただ補助金の窓口になっていて、実際には文化振興課だとか、あるいは観光課か何かやるなんていうところがありまして、学芸員が必ずしも主導的な立場にはないような気がしてはいます。やはりこういう事業の中では、学芸員の役割というのが非常に大きなことになるだろうなと思います。先程の報告の中で、町田さんには学芸員の役割について御報告頂きましたけれども、同じようなことで学芸員の役割として感じられているところございましたら、どなたか御発言頂けると有難いのですが、大川さん、よろしいですか。

【大川】 齋宮歴史博物館と地元の関わりでいきますと、齋宮跡を国の史跡指定をした際には、地元の中でも喧々諤々の話があって、指定時でも住民すべての同意が取れていません。指定40年たってその後の経緯があっても、すべての住民に理解が得られているわけではありません。

そんな中でやってきていますので、最初の頃は博物館と住民の間の壁というかちょっと距離がありました。史跡内の植栽とかについても、昔は万葉の花しか植えちゃいかんなんて言った職員がいたらしくて、それは20年、30年たっても「あのとき、自分はこんなことを言われて頭にきて、（良かれと思ったのに）やる気がなくなった。」みたいなことをいまだに言われたりします。

学芸員は、場合によっては替わっていきます。だけれども、ゆっくりとしか住民は替わっていかない。その間の関係を良くしていくには、学芸員とか文化財技師も、もう少し住民にも寄り沿ってやっていると、という気はしています。そうした中で、私自身の経験としては、平成27年度に完成した復元整備を進める際には、住民に事業に関わる情報を丁寧に説明しながらやっていくとか、皆さんの意見を聞きながら、こういう活用の仕方をしてほしい、ということ議論しながら進めてきましたので、少石トーンが変わってきまして、住民の中から復原建物の管理なんかを買って出てくれるような団体も出てきましたし、そうした中でようやく、こちらから少々のことを言っても、「何やあいつら」じゃなくて、「そうか、そうは言うけどなあ。」くらいで収まる場所までは来ているのかなという気はしています。

同じ博物館でも、私は野外で発掘と整備を担当している調査研究課というところに所属しているので、もともと住民とは真正面で接することが多いのですが、一方で展示事業を中心とする学芸普及課も最近は地元の町と一緒に齋宮のPRをやるということに関わってきて、地元と交わったり一緒になって考えたりする機会が増えてきました。恐らくどこでもそうだと思うのですが、文化財技師

とか学芸員は、ある意味妙なところで「自分は専門家だ」という意識が強いのではないのでしょうか。もちろん、その専門のところはちゃんとしなければと思うのですが、ちょっと地元にも出て、地元の内側に入った考え方も少し理解しながら、自分たちの言いたいことを伝えていくという環境を、自分たちから作っていく必要があるのではと考えています。文化遺産を活用してまちづくりを進める上では、やっぱり頑張ってもらうのは地域とか地元であって、私たちはそれに対してできるだけ確かな意見をお伝えするデータベースであったり、地域を磨くための良い触媒であったりしたいというのが、私の今の気持ちではあります。

【内田】 ありがとうございます。手島さんは学芸でも、地域に非常に近いところにいらっしゃると思いますが、今のお話はどのように感じられましたか。

【手島】 鳩山町でも瓦作りのボランティアさんというのは、基本的に町の住民なのです。なので、ボランティアでいろいろ協力してくれてもいるけれども、一方で住民として思うところもあるということで、うちの場合、一旦はちょっとこじれてしまって、ボランティア団体は解散になってしまったのです。ですが、その活動などを通じて、町の文化財を好きになってくれたという人たちもたくさんいらっしゃいます。そのためか1回解散してからもイベントの時に、今度は参加者という形で顔を出してくれて、様子を見に来てくれたりするような人たちも残っております。やはり今おっしゃった、地元の側に立った考え方やしっかり情報を提供していくというのは、文化財を支えていくのは基本的には地元の住民たちですので、私たちも理解を得られるように、文化財についての情報だけではなくて、色々コミュニケーションを取りながらやっていくのは本当に大事だなと考えております。

【内田】 時間も来ておりますので、これで終わりたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

—— 了 ——

(文責 内田和伸)